

応用言語学研究室の歩み

草薙 裕

1. はじめに

応用言語学コースは、発足以来 25 余年の間、研究科の中では群を抜いて発展してきた。それは単なる自負ではない。科目数で表される教育内容、教官数、学生数、博士号授与者数、教官の専門のバラエティ、そしてその推移など、他のコースと比べてみれば一目瞭然である。また、それとともに、数の多さや専門の多様性にもかかわらず、非常にまとまっていることなどにも現れている。

本コースの発展は、いくつかの段階に分けられる。まず、発足当時、ついで 1979 年の日本語教育研修者養成に向けた科目の追加、さらに 1985 年の日本語・日本文化学類設立に伴う教員増や学生定員増またそれに伴う科目の充実、近年の若手教員の参加といったことが次々と起こり、その都度充実の度を増してきた。

以下、コースの科目と担当教官を中心にその発展を概観しよう。なお、教官名には敬称を略す。また、年度は西暦の下二桁で表す。

2. 発足当時

応用言語学をコースとして位置づけたことは画期的なことであった。応用言語学の定義は難しく、簡単にいえば、理論言語学の外国語教育への応用と言語学と他の領域との学際研究ということになるが、最初は、言語行動論(林四郎)、言語発達論(芳賀純)、言語運用論(比嘉正範)という、後者に属する科目で出発した。さらに、76年から草薙裕が計量日本語学を担当した。これは、81年に数理言語学と科目名が変更されるまで日本語学コースに位置づけられていた。なお、この科目は後に、コンピュータ言語学と再度変更さ

れた。

3. 日本語教育

79年に本コースのなかに、日本語教育研究者養成のコースが設けられ、日本語教授法(寺村秀夫、草薙)、日本語構造論(寺村)、日本語資料購読(馬淵和夫)、心理言語学(芳賀)、日本社会言語学(比嘉)、日本文学特講(犬井善壽)と科目が大幅に充実した。

84年に留学生センター(当時は留学生教育センター)、85年に日本語・日本文化学類がそれぞれ新設された。これに伴い、それぞれに所属する新しい教官の何人かが本コースの担当になった。大坪一夫(日本語教授法)、高田誠(社会言語学)、湯澤質幸(日本語構造論)、90年の荻野綱男(言語行動論)、石田敏子(日本語教育特講)、92年の堀口純子(日本語教授法)、94年の岡崎敏雄(同)、坪井美樹(日本語資料購読)などである。これらの教官は定年退職者や中途退職者の後を埋めたり、担当が替わったものだが、なんといっても、いろいろの分野の教官がそろったことより専門的な教育ができるようになったこと、それが嬉しかった。

教官増ないし教官の交替は最近まで続き、新しい科目も増えた。99年の竹沢幸一(応用言語学)、シュテファン・カイザー(同)、00年の砂川有里子(日本語教育)、01年の杉本武(コンピュータ言語学)、沼田善子(日本語研究)などである。発足当時の科目はすべて姿を消し、日本語教育を中心とした科目の充実が目立つようになった。

4. 教育

応用言語学コースの教官は非常に教育熱心だといえる。ほぼ毎月研究会を開き、学生たちに博士論文へ向けた研究発表をさせている。いろいろの分野の教官、いろいろの分野に興味を持つ学生が一堂に会して研究発表を行い、批評や質疑応答をする。活発な意見の応酬で刺激を受ける。また、一方では、院生やOBの研究発表の場を作るために、94年からコース独自の研究誌『筑波応用言語学研究』の出版を始めた。これも今年で8号を迎える。

コースの盛んな研究・教育活動の結果、85年にアンドレイ・ベケシュ（スロベニア）とレベッカ周（香港）に博士号が授与されて以来、00年度末までに合わせて17人に課程博士号が与えられた。01年度中にはさらに6人に授与されることになっている。また、本コースの単位取得退学者にあっても、90年以来すでに4人が論文博士号を取得しているし、現在準備中の人も3、4人いる。

本コースで多数の博士が誕生しているのは、応用言語学が新しい学問領域であることから、我々が新たに論文の基準を定めよう、そして、厳しい指導を率先して行おうという機運が、教官の中にあることによる。甘くしようという気持など誰も持っていない。副査として論文審査に加わった他コースの教官から、非常にレベルの高い論文だと誉められた者も多い。

ただ、一つ残念なのは、日本人の学生で在籍中に博士論文を提出した人が、まだ一人しかいないということだ。日本人学生諸君の奮起を望みたい。

最後に本コースの教官のOBとして、コースの発展を切に祈る。

謝辞 本稿をまとめるに当たって、本コースの湯沢質幸教授と3年次生の俵山雄司君にデータを集めてもらった。ここに感謝の意を表したい。